研究ノート

「家庭支援論」受講前と受講後の態度変容
―映画「誰も知らない」鑑賞後の意見から―

足　立　圭　司

A Study of the Attitude Change on “Home Support Theory”
Lecture before and after a Series of Lectures:
From the Comments after Appreciation of the Movie／ “Nobody Knows”

Keiji ADACHI

【要　　旨】

本研究は2012年４月から７月にかけておこなった「家庭支援論」において講義開始前に，映画「誰も知らない」を学生に見せ子どもたちのためにどのようにすることが一番大切だったか意見・感想を得た．次に全ての講義終了後，再度，本映画をもとに，同様に意見・感想を求め，学生から講義前後に態度変容がみられたかどうか検討しようとしたものである．

その結果，両親の責任について大きく態度変容がみられた．また．近隣の気づきのなさや，あるべき社会の理想像，あるべき母親像と言った規範的側面からの意見が増加した．子育てに係る問題を社会的に理解した証左とも受け取れる．しかし時間的経過による態度変容の効果を排除できず，今後更に研究する必要がある．

【キーワード】

家庭支援論　　子育て　　育児放棄　　社会的責任　　態度変容

１．はじめに

保育士養成課程における必修科目である「家庭支援論」は今日の家族の状況について理解を深め，社会的環境の変化をふまえて，子どもの健やかな成長発達に必要な子ども・家族への支援について学ぶものである．特に子育て支援の様々な取り組みの現状と課題および今後の展開等について保育実践現を通して考える科目である．

「家庭支援論」の講義を開始するにあたって，昨今の児童虐待問題や育児困難家庭の増加などによって，家庭支援の持つ意味はますます大きくなってきている．家庭支援の問題は広範囲にわたり，学生が学ぶべき領域は大きい．「家庭支援論」でいかに主体的な学びの姿勢を確立するかといったことが重要になってくる．

ここで，「保育所保育指針」から保育者として保護者支援の望ましい姿を見てみよう．その

第六章保護者に対する支援には以下のことが述べられている.

「保育所における保護者への支援は，保育士等の業務であり，その専門性を生かした子育て支援の役割は，特に重要なものである．保育所は，第一章（総則）に示されているように，その特性を生かし，保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について，職員間の連携を図りながら，次の事項に留意して，積極的に取り組むことが求められる.

1　保育所における保護者に対する支援の基本

(1)　子どもの最善の利益を考慮し，子どもの福祉を重視すること.

(2)　保護者とともに，子どもの成長の喜びを共有すること.

(3)　保育に関する知識や技術などの保育士の専門性や，子どもの集団が常に存在する環境など，保育所の特性を生かすこと.

(4)　一人一人の保護者の状況を踏まえ，子どもと保護者の安定した関係に配慮して，保護者の養育力の向上に資するよう，適切に支援すること.

(5)　子育て等に関する相談や助言に当たっては，保護者の気持ちを受け止め，相互の信頼関係を基本に，保護者一人一人の自己決定を尊重すること.

(6)　子どもの利益に反しない限りにおいて，保護者や子どものプライバシーの保護，知り得た事柄の秘密保持に留意すること.

(7)　地域の子育て支援に関する資源を積極的に活用するとともに，子育て支援に関する地域の関係機関，団体等との連携及び協力を図ること.」[1)]

つまり保育士は，保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について大きな任務を持っているということである.

筆者は2012年前期に「家庭支援論」を講義する機会を得た．保育の専門性を獲得し保護者への支援力を身につける姿勢を伝えるために映画「誰も知らない」(2004年公開　監督・脚本是枝裕和）の鑑賞を行った．以下この取り組みによって，いかに学生の意識・態度が変容していったかを報告する.

2．研究方法と倫理的配慮

実施期間は2012年４月から７月である.

今回学生に見せた映画「誰も知らない」は，母親による育児放棄をテーマとしている．本講義（家庭支援論）の中では保護者に対する支援のあり方を学生に理解させるものである.

講義開始前に映画を見せ感想をレポートとして書かせ，次に期末試験時にこのような事件が起こらないようにするにはどのようにしたらよいかを書かせた．講義開始前と15回の講義終了後の学生の意識変化を見た.

学生のレポートと全講義終了後の意見を対にして比較し意見・感想にタイトル付けを行ったものを巻末に示した．各意見は複数回答である．今回は講義開始前と15回の講義終了後の学生の大きな意識変化に着目し比較検討を加えた.

倫理的配慮として本研究の目的と資料の使われ方を示し，研究承諾書をとり受講生45名中43名より承諾を得た．本研究ではレポート提出があった40名を対象として集計した.

3．映画「誰も知らない」について

「この映画のモチーフになったのは，一般的には「西巣鴨子供４人置き去り事件」と呼ばれるものである.

父親の違う４人の兄妹を残し，母親は新しい恋人と暮らすためにアパートを出る．こどもたちは誰も出生届が出されておらず（つまり法律的には彼らは存在していない)，学校へも行ったことがなかった．彼らは時折母から送られて来る現金書留を頼りに，アパートの一室で半年に渡って生活を続けて行く.

末妹の死が発覚して，こども達だけのこの生活には不幸な形でピリオドが打たれるのだが，驚いたことに彼らの存在（隠れて暮らしていた

３人の妹たち）をアパートの住人は誰ひとり知らなかった．つまり，彼らは社会的にも存在していなかったわけである．

事件は当初警察が妹の死を兄による折檻死と断じたこともあって，家族の絆が希薄になっている現代の都市の闇を象徴する出来事としてセンセーショナルに報道された．しかし，この少年が逮捕された当時14歳で罪に問えなかったことに加え，審判の過程で折檻死への兄の直接的な関与が否定されると，メディアの批判は母へ集中する．」

『演出ノート』　是枝裕　より引用[2)]

映画の中で末妹は，椅子の上に立って転落し頭を打ち病院にもかかれずに亡くなる．兄は亡くなった末妹をトランクに詰め友人と二人で羽田空港空き地に埋葬するという結末で終了する．

講義開始前の上映後の学生の反応は，実際の事件のマスコミの反応と同様に非難は母親・父親に集中した．では，全講義終了後の学生たちの意見はどのように変化したのかを見ていきたいと思う．

４．結果の分析

まず，学生の感想を講義前とすべての講義終了後に分けて整理したものを表１．にまとめた（複数回答）．次に講義前後とも家庭支援への価値観が大きく変化しなかった代表的なものをまとめたものが表２．である．表３．には講義後に大きく家庭支援への価値観へ変化した代表的なものを示した．

これらの表にある「親の責任」とは子どもの両親の育児放棄への責任を問うものである．「解決への客観的思考」とは究極の設定での映画の中でも何とか解決の方向を見いだそうとするニュアンスがあるものを指す．「母親への共感と子育ての責任とのジレンマ」とは母親の幸せになる権利と育児放棄を整理しきれない意見をいう．審判的態度とは解決への模索意見が無く一方的に責める態度が強く見られたものをいう．

表１を見てみると，母親の責任・父親の責任を問う意見がそれぞれ講義前後で24から８，21から６と激減している．その他「近隣の気づき」のなさを指摘したものも22から12へ減少した．

表１　「誰も知らない」鑑賞後の感想

視点　講義開始前

母親の責任	24
近隣の気付き	22
父親の責任	21
解決への客観的思考	8
母親への共感と子育ての責任とのジレンマ	7
職業意識への振り返り	5
子どもたちへの共感	4
審判的態度	4
周囲の環境の希薄性	3
専門知識・経験の必要	1
憐憫の感情	6
困惑の感情	2
母親自身の価値観が違う	1
ストーリーが読めない	1
子どもたち自身が対応（届け）	1
出生届をだせばよかった	1

視点　講義終了後

解決への客観的思考	18
近隣の気づき	12
あるべき社会の理想像	9
あるべき母親像	8
母親の責任	8
父親の責任	6
心のケア	1
専門知識・経験の必要	1
相談・援助者の存在の必要	3
母親への理解と子育ての価値観の主張	6
問題解決の一般的理解	3
その為の勉強（目的意識）	2
問題解決の困難性	2
審判的態度	2
ストーリーが理解できていない	1
勘違いの回答	1

替わって講義後に増加したものはこどもたちへの共感や地域社会の観点である.

逆に，講義後に「あるべき母親像」を述べた意見が急増している．これは家庭支援論でめざした価値観ではなく，映画上映後４ヶ月あまり経過した時点での意見調査であったため学生個人がもともと持っていた価値観が表出したものと推測している．この点については今後とも調査をしていく必要がある.

参考資料として，表２．に講義前後とも家庭支援への価値観に変化しなかった代表例を示した．また表３．には講義前後で家庭支援への価値観に変化した代表例を示した.

⑴　講義開始前の意見・感想の特徴

講義開始前の意見・感想では母親の責任・父親の責任・近隣の気づきのなさを指摘したものが全体の60％になった．その他の意見として「憐憫の情」「困惑の感情」として解決策に思いが至らずとまどう姿が７％みられた.「家庭支援論」を学ぶ者としてこの映画をとらえたのは「子どもたちへの共感」「専門知識・経験の必要」の意見を述べた学生が4.5％あった.

また映画「誰も知らない」の制作者の意図やストーリーについて行けなかった学生が３名いた．今後教材を選定する上でも教材提示の際の予備知識等に配慮をしていく必要がある.

⑵　全講義終了後の意見感想の特徴

講義開始前の意見・感想とはかなり様相が異なる．母親の責任・父親の責任の指摘が大幅に減少し（減少率　母親の責任68％減，父親の責任71％減）ている．近隣の気づきのなさや，あるべき社会の理想像，あるべき母親像と言った規範的側面からの意見が増加した．子育てに係る問題を社会的に理解した証左とも受け取れる．しかし映画「誰も知らない」は強烈なメッセージ性を持っていたため，はじめ両親に対する非難の意見が多く見られ，時間が経過する（４ヶ月）なかで学生は冷静になって客観的な意見・感想を述べるようになったのかもしれない．時間的経過による態度変容の効果を排除できず，結論を出すにはさらに研究，分析が必要である.

図１．に講義受講前後の意見の変化を16のカテゴリーに再整理して示した.

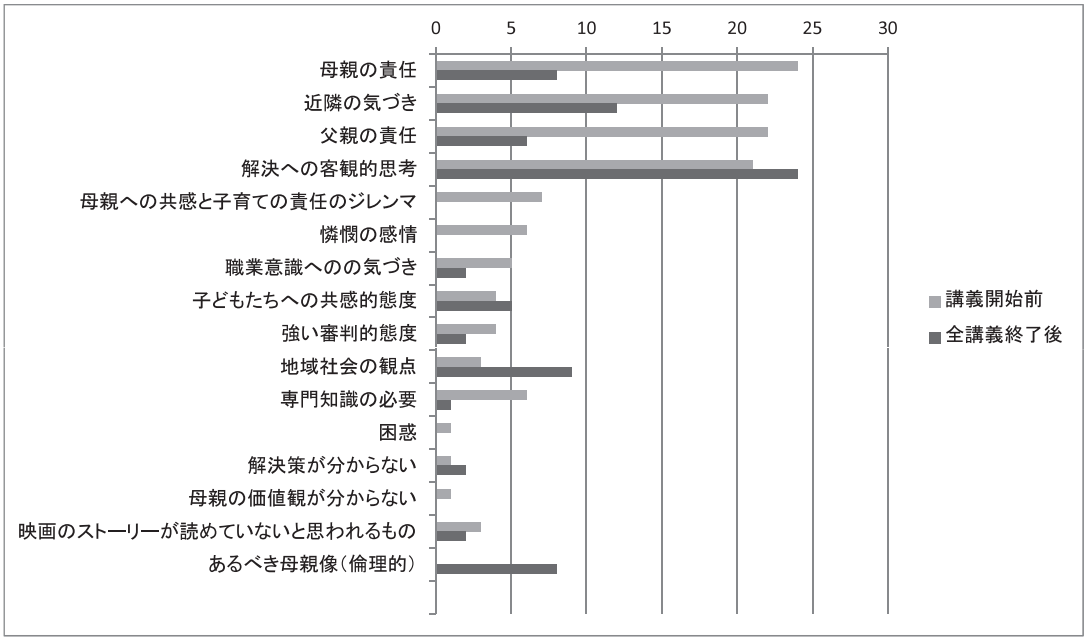

図1. 講義受講前後の意見の変化（複数回答）

表２．学生ごとの集計（講義前後とも家庭支援への価値観へ変化しなかった代表例）

番号	主たる特徴		講義開始時点での意見・感想	主たる特徴		全講義終了後の意見
		視点　講義開始前	映画「誰も知らない」で子どもたちのためにどのようにすることが一番大切だったのか、大人の役割について考察してください。		視点　講義終了後	映画「誰も知らない」で子どもたちのためにどのようにすることが一番大切だったのか、思うところを書いてください。
1	親の責任	母親の責任 父親の責任 解決への客観的思考	・母親が自分の子どもを置いて帰ってこないのは責任感がないと思う。 ・一番必要なのはお金を渡すことではなく、愛情だと思った。 ・4人の子どものそれぞれの父親と連絡を取ったり、会う機会を作り今の状況が分かるようにすれば良かった。 ・近所の人々について、コンビニの店員や大家さんなど異変に気がついたらすぐに児童相談所などに連絡をすべきだった。	愛情重視の視点	愛情重視の視点 近隣の気づき	・母親がお金を送るだけでなく、自分の子どもに愛情をもって接してあげなければならない。 ・周囲の人々の気づきがあればこのようなことにはならなかった。
2	親の責任	母親の責任 父親の責任 近隣の気付き	・親には産んだからには子どもを幸せにするように育てる責任がある。 ・近所の人には絶対おかしいと思っている人もいるだろうと思う。声をかけるべき。	愛情重視の視点	愛情重視の視点 近隣の気づき	・愛情を持って接してあげるべき。 ・お金を送れば大丈夫という考えがそもそも間違っている。 ・周囲の人の理解が大切。
3	親の責任	審判的態度と共感的態度 解決への客観的思考	・母親：生活に不満を持ち幸せになりたいという思いは分かるが、だからといって子どもたちを放置することは人間として最低。 ・母親はもしかして本当につらく、誰にも相談できず我慢の限界だったかもしれない。 ・その母親の気持ちに気づき支えてあげる人も大切。	親の責任	母親の責任 問題解決の困難性 解決への客観的思考	・母親は正直に子どもが4人いることを伝え、母親らしく責任を持って育児することが大切だった。 ・母親は他人他の機関の手を借りることも出来たはず。 ・困難な問題でも相談しやすい時代になって欲しい。
4	親の責任	母親の責任（倫理） 父親の責任	・母親は毎日家に帰り子どもちの様子をみたり育児をしないといけない。 ・きちんと学校に行かせるべき。 ・父親も離婚したとはいえ子どもの状況が分かっているのに助けに行かないのはダメ。	親の責任	あるべき母親像 父親の責任	・子どもにとって親の存在は学校の先生などとは違いとても信頼のある存在だから、子どもの傍に親がいないということは子どもにとって一番の不安。母親は子どものそばにいるべきだ。 ・離婚後の父親も子どもたちの状態を分かっていながら助けないのは虐待と同じ。
5	親の責任	生活実態の気付き 母親の責任 父親の責任 近隣の気付き 自らの行動指針へ	・こういう生活をしている人たちもいるのだなと思った。 ・子どもを放置してどこかへ行ってしまう母親はもう母親ではないと思う。 ・母親が許せない。父親も子どもたちのことを考えてやるべきだ。 ・近所の人も何かしら気づくことがあったはずだ。 ・今こういう状況になっている子や家族はたくさんいると思うと自分にできることはないのかと考えた。	親の責任	母親の責任 母親への一定の理解と子育ての価値観の主張	・母親が子どものために働いたり、食事をつくるべきだ。 ・母親にもいろいろ考えがあったかもしれないが子どもの一番近くで子どもの成長を見守ることが一番大切。
6	親の責任	母親の責任 父親の責任 近隣の気付き 子どもたち 自身の対応	・自分のこどもを捨ててもう一つの家庭を作るのは最低。 ・父親も母親が出て行ったのならなんらかの対応をするべきだった。 ・近所の人もぼろぼろの服を着ていたら、普通異常に気づくはず、気づかない方がおかしい。 ・子どもたちから周りの人に頼るべきだった。	親の責任	審判的態度 問題解決の一般的理解	・母親が一番悪い ・コンビニの店員も気づいていないふりをしているように感じた。 ・実の父親も少しくらい気にかけるべき。 ・同じアパートの住人だったら気づいて通報すべきだった。周囲の人たちの対応の仕方に問題があった。 ・ここで一番大事なのは「保護」することだった。

表３．学生ごとの集計(講義前後で家庭支援への価値観へ変化した代表例)

番号	主たる特徴		講義開始時点での意見・感想	主たる特徴		全講義終了後の意見
		視点 講義開始前	映画「誰も知らない」で子どもたちのためにどのようにすることが一番大切だったのか、大人の役割について考察してください。		視点 講義終了後	映画「誰も知らない」で子どもたちのためにどのようにすることが一番大切だったのか、思うところを書いてください。
1	親の責任	母親の責任 父親の責任 怒りの感情に支配 解決への客観的思考のめばえ	・母親は周りの人に相談するという考えはなかったのか。施設に預ける事も考えて欲しかった。 ・母親はまだ遊びたいのであれば子どもを産まないで欲しい。責任を持って育てて欲しかった。 ・母親に対して苛立ちを感じた。 ・父親たちは子どもがどのような生活をしてきたのか、知らなかったではすまないと思う。 ・父親たちはなにをしているのか腹が立った。 ・近所の人も子どもたちの様子がおかしいくらいは理解できていると思う。「通報」という考えはなかったのか。	社会的理解への視点	社会のあるべき理想像 自らの行動指針 その為の勉強（目的意識）	・周りの人に助けてもらう、周りの人が様子をみる、助け合う社会。 ・現実にこのような問題に遭遇している人たちを助けたいと思った。 ・今後このようなことを起こさない為にはどうすればよいか勉強したい。
2	親の責任	感情的意見 母親の責任 父親の責任 近隣の気付き	・まず母親がずっと帰ってこないことや長男に家のことを任せっきりだったことに怒りや悲しみを感じた。 ・母親が「じぶんが幸せになりたい」という気持ちは分かるが母親である以上責任をもって子どもを育てる義務がある。 ・父親たちも子どもに対しまともに相手にしていない、親身になって助けてあげるべきだった。 ・子どもたちの様子から近所の人は不審に思わなかったのか。通報するのが自然なことではないか。	社会的理解への視点	解決への客観的思考 子どもへの価値観 子どもの最善の利益	・近所の人たちの気づきやコンビニ店員の持つ情報がそのままになった。通報に繋がらなかった。 ・確かに保護をすれば4人は一緒に暮らせなくなるかもしれないが子どもたちのいのちを守るため必要なこと。 ・子どもの命を守ることが一番大切。
3	親の責任	解決への客観的思考 地域社会の観点 専門知識・経験の必要	・母親は望んでこの子どもたちを産んだ訳ではなかったのかもしれない。 ・親としての責任を放棄している。 ・父親たちも無責任。 ・近所づきあいが希薄になった現在このような家庭が日本にどのくらいあるのか気になる。 ・母子家庭や父子家庭の支援も、もっとちゃんとしたものにする必要。 ・社会、地域全体がもっと子どものことを考えられるようになっていけば「発見」されただろう。 ・自分自身しっかり学んで映画のような子どもたちを増やすことの無いようにしなければならない	社会的理解への視点	周囲の気づき 父親の責任 問題解決の困難性 専門知識・経験の必要	・近所の人が気づいたらすぐに警察へ通報すべきだった。 ・結婚していなかったとはいえ、子どもたちの父親が保護するか育てられなかったら児童相談所に相談すべき。 ・長男の友達も何か変な家庭と気づいていたはずなので親を介してでも通報出来たはず。 ・近所づきあいが希薄になった今見つけるのは難しいのかもしれない。 ・小さな命を助けるのは知識・経験だ。
4	自身の気づき	母親への共感と子育ての責任とのジレンマ 近隣の気付き 子どもたちへの共感	・母親もいろいろつらいと思う。「お母さんは幸せになっちゃいけないの」というのも分かるがある程度自分を犠牲にして子どもを守っていくべき。 ・父親も責任を取って家族としての見守りが必要。 ・近所の人について、本当に気づかなかったのか疑問に思う。 ・子どもたちは学校へも行けず家の中でじっと生活するのはつらいと思った。	客観的思考	母親の責任 愛情重視の視点 解決への客観的思考 子どもたちへの共感	・母親が幸せになりたいというのは仕方ない。しかし子どもを産んだ責任がある。 ・愛情を持って子どもたちと一緒になって幸せになる道を探すべき。 ・関係機関に相談すれば良かった。 ・近所の人も知らないふりをするのではなく、様子を見に行ったり児童相談所に知らせるなどが大切。 ・子どもたちの「兄弟一緒に暮らしたい」というきもちは分かる。

(3) 学生ごとの態度変容例の検討

表２．表３．に示した家庭支援への価値観が変化しなかった代表例，価値観が望ましい方向へ変化した代表例をあげたが，ここで少し検討をしてみたい．

変化しなかった例では，当初親の責任を問う意見のままの者，強い審判的態度を持ち続ける者，主人公らの生活実態への気づきを得ながらも母親の責任に問題を還元してしまう者，親の責任を強く問い４ヶ月後には審判的態度（問題解決の当事者の視線でなく第三者からの視線）への変化が見られた者などであった．保育者の家庭支援の視点としては第三者ではなく，問題解決援助の当事者であるという強い意識が必要であろう．

次に家庭支援の視点から望ましい観点への変化をした例を見てみよう．親の責任を問いながらも映画鑑賞中に解決への客観的視点がめばえ，４ヶ月後には子育てのための社会のあるべき理想像またその実現のために勉強したいと意欲を示す者，親の責任や強い感情的感覚に支配されていたが講義終了後には子どもたちの命を守るという強い使命感を示した者，４人の子どもを放置した母親を一方的に非難することなく共感的に理解しようとする姿勢と子どもが亡くなるという事態とにジレンマを感じ，そのジレンマを問題意識として持ち続けている者もいた．

価値観の変化の有無にかかわらず，この映画学生たちの心を強く揺さぶったことは間違いない．

５．家庭支援に当たる保育士として

映画「誰も知らない」において問題解決のために要求されるものは実はとてつもなく困難なものである．地域社会の再構築と子どもを持つ親自身の意識変革，もし問題が起こったときのセーフティネットがきっちりと構築されていることなどが要求される．

「保育所保育指針」からみると，①子どもの最善の利益，②成長の喜びの保護者・保育士との共有，③保護者の気持ちを受けとめ相互の信頼関係を基本に自己決定を促進すること④プライバシーの保護⑤地域資源の積極的活用と協力であろう．

学生たちにはあまりにも困難な課題を課してしまったかもしれないが，今後彼らが児童福祉の道に入って行こうとするならネグレクト等育児に関わる虐待問題は避けて通ることは出来ない．

６．おわりに

日本では，戸籍はありながら所在不明の児童が976名にのぼる．（2012年５月現在）[3]保育施設等で家族支援に当たる保育士に期待されるものは大きい．また本編第３章で学生が指摘したように一般の人々の気づきの必要性・責任はそれ以上に大きい．今後とも社会的視点を持った保育者養成に務めていきたい．

引用文献

１）厚生労働省　保育所保育指針（平成20年告示）2008. フレーベル館

２）是枝裕和監督作品　誰も知らない　デジパック仕様封入付録　演出ノート　2005. バンダイビジュアル

３）文部科学省　「居所不明の児童生徒に関する教育委員会の対応等の実態調査」（平成24年５月１日）による
http://www.mext.go/a_menu/shugaku/detail/1332148.htm